

旧村川別荘だより

174号

4月の月例会について

4月の月例会には、今野より佐原の歴史について解説がありました。

「佐原について」

昨年度の研修は佐原を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症防止の観点から中止となりました。とても残念だったのですが、佐原の魅力を紹介できないかと考えていました。佐原の歴史を紐解くと、意外と我孫子と似ているかも？などと思い、月例会で少しお話ししました。

① 中世の佐原

中世以前は、佐原が位置するところは香取の海と小野川に挟まれてできた砂洲や氾濫原で、鎌倉時代初期にはじめて「佐原」の名称が現れました。

中世になると源頼朝が東国に流された際に伊豆での蜂起に失敗し、安房や上総で苦境に陥っていた際に支援した千葉介平常胤は、鎌倉幕府設立に携わる有力な御家人となりました（今年の大河ドラマでもこの辺りの話がありました！）。千葉常胤には武勇に優れた六人の男子がおり、そのうち五男胤通（たねみち）と六男胤頼（たねより）の二氏が香取市域に領地を持っていました。

天正18（1590）年、豊臣秀吉が小田原城に籠城する北条氏を征伐し、天下統一を果たした一連の戦い（小田原の役）での北条氏の滅亡に際して、重臣であった千葉氏も滅亡し、領主も千葉氏系の粟飯原（あいばら）氏から代官の吉田佐太郎に変わりました。

② 江戸時代

慶安2（1649）年に内田正信が小見川藩主となりました。三代将軍・徳川家光の側近であった正信は、家光が47歳の若さで病死した際、側近の大老・堀田正盛らと即日切腹し殉死しました。その後、何度かの危機がありながらも小見川藩が

廃藩置県を迎えるまで存続したのは、正信が将軍家光の死に臨み、殉死し果てた功績によるところが大きいと言われています。

それでは、商業都市佐原の発展を見ていきます。

1) 利根川東遷事業

江戸幕府の大規模治水工事により、東京湾に注いでいた利根川の水量の多くを銚子から太平洋に流すことに成功したことで、銚子・佐原などの利根川沿いの町が舟運による物資の集散地として発展しました。その結果、佐原や小見川の中心部に河岸ができ、酒や醤油などの醸造業が興りました。

2) 佐原の発展

利根川の東遷後、台地から利根川に流れ込む小野川の両岸と、これと交差する香取街道を中心に、遅くとも元禄期（1688～1704）には町並みが形成されました。この時期には、利根川の東遷事業も進み利根川水系の舟運を基盤に、江戸と結びついた商品流通機構が整備されたと考えられます。このことから陸路と水路が交わる交通の要所であったことがうかがえます。交通の要所であったことから、さらに、村外から入り込んできた商工業者や奉公人を吸収して戸数と人口の増加を続け、天保9（1838）年には1163軒・5649人とあり、利根川筋で最大級の町場となっていました。また、江戸との交流は物資だけでなく、江戸の最新の文化も流入することとなりました。佐原は地理学者・測量家 伊能忠敬をはじめとする知識人や文化人を多数輩出しています。

一方、水量の増加により水郷地帯は水害に悩まされ、利根川沿岸は土砂の堆積が進行しました。しかし、これを機に氾濫原において新田開発が進んだことで、この地域は道路の代わりに舟での移動を基本とし、増水時の避難小屋と蔵を兼ねる水塚を設けるなどの工夫もなされています。

3) 佐原の祭り

佐原の山車行事の起源は定かではありませんが、少なくとも18世紀前半には原型が見られたようです。神輿などを中心として構成された行列、いわゆる練物(ねりもの)と呼ばれる祭礼でした。やがて、文化的・経済的に力を蓄えた各町内が意匠を競いながら行事を行うなかで、江戸祭囃子に各種邦楽の要素と里謡や流行歌まで取り入れ、佐原囃子が成立しました。この佐原型の山車と佐原囃子を用いる祭礼は、佐原を中心に、千葉県北東部及び茨城県南部に広く分布し、千葉県内では香取市小見川、東庄町、多古町など、茨城県内では潮来市、鹿嶋市、行方市、稲敷市などに伝播し、佐原を中心とする一つの地方的な山車文化圏を形成しています。

③ 近現代

歌人 若山牧水や北原白秋など当時の著名な作家による水郷地域を詠った紀行文が取り上げられると、この地域の観光人気が高まりました。昭和5(1930)年から始まった水上プロペラ機を使用した観光飛行は、佐原から銚子まで15分で結び、当時としては高額な運賃(片道10円:現在換算で約5万円相当)であったにもかかわらず多くの観光客が集まりました。また、昭和6(1931)年に就航した水郷汽船は、全長50m、3階建ての白い船体で、土浦・潮来・鹿島を行き交い、多くの観光客を運びました。

④ 布佐との関係

布佐と佐原が直接関係あるわけではありませんが、佐原の歴史を紐解くと、意外と布佐と似ているなと思ったので、ご紹介したいと思います。

1) 交通の要所

佐原は香取街道と利根川の舟運でしたが、布佐は成田道中、鮮魚街道、利根川の舟運と陸・水運の要所でした。利根川の舟運がはじまったのは、佐原と同じ理由であることから、利根川をとおして二つのまちが同様の文化的な発展をとげたことがうかがえます。ちなみに、水戸道中が柴崎へと変わる前は布佐が水戸道中だったことから、古くから街道をとおして人の流れがあったことがうかがえます。

2) 布佐の発展

布佐のまちの発展は、利根川の舟運事業がはじまったことが大きいと考えられます。佐原と同じような歴史ですが、佐原は利根川から流れる支流小野川沿いにまちができています。対して布佐のまちは直に利根川に面していたため、明治期の利根川改修工事により堤防ができ、川との接点がなくなってしまったことが挙げられます。この工事により、布佐のまちは街道に面して広がるようになりました。



大正6年ごろの布佐の風景(『我孫子-みんなのアルバムから』より)

3) 竹内神社例大祭

佐原には神輿・山車が列をなす祭礼がありますが、布佐で行われる竹内神社例大祭も神輿と山車で構成されている祭礼があります。この祭礼は9月に3日間かけて行われるもので、江戸時代から続くとされています。



4) 知識人の排出

江戸=中央からの文化が直接入ってきた佐原や布佐は多くの知識人を育む土壌を培っていました。布佐では我孫子市でも古い学校の一つ布佐小学校がありますし、千葉県でも創立時期が古い「布佐文庫」がありました。また、岡田武松が気象学者として世界的に有名な人物となりました。

事務局より

今回のおたよりに5月26日(木)に研修会のご案内を同封いたしました。次の月例会もしくは5月10日(火)までに事務局にお知らせください。

次回の月例会は5月11日(水)教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

よろしくお願い申し上げます。

令和4年5月23日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL.04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより

175号

5月の月例会について

5月の月例会には、今野・柏瀬より研修旅行先の群馬県富岡について解説がありました。

「富岡市の歴史について」

2年間に渡り、実施を見送っていた旧村川別荘市民ガイド研修旅行ですが、この度、感染対策を講じたうえで開催を決定しました。

目的地は群馬県の世界遺産である富岡製糸場です。月例会では研修旅行に先立って、富岡市の概要と、富岡に官営製糸場が建てられるまでの歴史的な背景を今野より解説しました。

① 富岡市の概要



世界文化遺産に登録されている富岡製糸場のある街、富岡市は、群馬県の南西部に位置しています。

安中市・下仁田町・甘楽町・高崎市に隣接し、東京から約100kmの距離にあります。上信越自動車道及び関越自動車道によって東京と約1時間で結ばれており、このアクセスの便利さが大きな特徴となっています。地理的環境をみると、東は関東平野に続く平坦地で、西には上毛三山

(群馬県を代表する赤城山、榛名山、妙義山を総称して表す言葉)のひとつである標高1,104mの妙義山(富岡製糸場の木骨の杉を切り出しました)、南には標高1,370mの稲倉山があります。

北は小高い丘陵地帯で、中央を鐺川とその支流である高田川(富岡製糸場の当初の水源)が流れ、緑濃い山々と清流が大きな特徴であり、人々は河川沿いに集落を形成し、暮らしを営んできました。

② 江戸時代の富岡市

富岡は慶長17(1612)年に徳川幕府の命により突如として町づくりが始まりました。同年4月1日に検地(土地の測量)が始まり、その結果、最も地味の悪い地が新田開発に選ばれ、開発が行われ、元和3(1617)年5月2日にまちの骨格が完成し、この日をもって富岡町という町名が付けられました。富岡は計画的に町づくりが行われた町といえます。

また、鐺川の上流に位置する砥沢村(現・南牧村)は大量に質の良い砥石が産出し、幕府から手厚く保護(御蔵砥)されていました。その砥石を江戸へ輸送するための中継地として、鐺川流域の中核的小都市としても富岡は発展しました。

新田開発の際に代官が陣屋地として策定していた広大な土地が、後の明治政府の殖産興業政策の一環として富岡製糸場の設立地となりました。

③ 明治維新後の富岡市と富岡製糸場

明治維新後、富国強兵を目指した政府にとって、外貨獲得のための、生糸の生産拡大と品質向上は日本の産業発展の最大の課題でした。しかし、当時は民間資本による工場建設は困難な状況であったため、富岡製糸場は政府自らこの問題に取り組むことを内外に示すべく、大規模な洋式繰糸器械を備えた官営の模範工場をつくることを決めました。政府の産業育成への積極的な関与は日本

の急速な経済発展の要因となり、富岡製糸場はその最初の拠点でした。

模範工場の基本的な考え方は主に3つでした。

- 1 つ目は洋式の製糸技術を導入すること。
- 2 つ目は外国人を指導者とする事。
- 3 つ目は全国から工女を募集し、伝習を終えた工女は出身地へ戻り、器械製糸の指導者としてすること。

こうした考え方をもとに雇い入れられたフランス人、ポール・ブリュナの指導のもと、西洋の技術を取り入れた官営模範器械製糸場（富岡製糸場）が設立されたのです。

富岡製糸場の設立計画を担当した政府の役人の一人、尾高惇忠とポール・ブリュナらが武蔵・上野・信濃の地域を調査し、次の理由により上野の富岡に場所を決定しました。

- 1.富岡付近は養蚕が盛んで、生糸の原料である良質な繭が確保できる。
- 2.工場建設に必要な広い土地が用意できる。
- 3.製糸に必要な水が既存の用水を使って確保できる。
- 4.蒸気機関の燃料である石炭が近くの高崎・吉井で採れる。
- 5.外国人指導の工場建設に対して地元の人たちの同意が得られた。

富岡製糸場は、国が建てた大規模な器械製糸工場、長さが約140mある繰糸所には300釜の繰糸器が並び当時の製糸工場としては世界最大規模でした。富岡製糸場の建設はフランス人指導者ポール・ブリュナの計画書をもとに明治4（1871）年から始まり、翌年の明治5（1872）年7月に主な建造物が完成、10月4日には操業が開始されました。繭から生糸を取る繰糸所では、全国から集まった伝習工女たちが働き、本格的な器械製糸が始まりました。

外国人指導者が去った明治9年以降は日本人だけで操業されました。官営期を通しての経営は必ずしも黒字ばかりではありませんでしたが、高品質に重点を置いた生糸は海外で高く評価されました。

器械製糸の普及と技術者育成という当初の目的が果たされた頃、官営工場の払い下げの主旨により、明治26（1893）年に三井家に払い下げされました。その後、明治35（1902）年には原合名会社に譲渡され、御法川式多条繰糸機による高品質生糸の大量生産や、蚕種の統一などで注目されました。昭和13（1938）年には株式会社富岡製糸所として独立しましたが、昭和14（1939）年には日本最大の製糸会社であった片倉製糸紡績株式会社（現・片倉工業株式会社）に合併されました。第二次世界大戦後は自動繰糸機が導入され長く製糸工場として活躍しましたが、日本の製糸業の衰退とともに昭和62（1987）年3月ついにその操業を停止しました。操業停止後も片倉工業株式会社によってほとんどの建物は大切に保管され、平成17（2005）年9月に建造物の一切が富岡市に寄贈され、その後は富岡市で保存管理を行っています。

平成17年7月には国の史跡に、翌年7月には主な建造物が重要文化財に、平成26（2014）年6月には「世界遺産一覧表」に記載されました。さらに、同年12月には繰糸所、西置繭所、東置繭所の3棟が「国宝」となりました。

お知らせ

我孫子の文化を守る会の美崎会長から、文化講演会のお知らせがありました。

文化講演会には村川堅固の孫にあたる村川夏子氏をお呼びし、村川堅固と嘉納治五郎の絆、そして我孫子とのかかわりをご講演いただきます。

ご都合がよろしければ、新型コロナウイルス感染症予防にご留意の上、ぜひご参加ください。

【詳細】

日時 6月5日（日）14:00～

場所 あびこ市民プラザ ホール

演題 「村川別荘と我孫子 嘉納治五郎との絆をたどって」

講師 村川 夏子 氏

（村川堅固の孫、堅太郎の長女）

参加費 会員・非会員 無料

申込 不要（先着60名）

事務局より

次回の月例会は6月2日（木）教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

よろしくお願い申し上げます。

旧村川別荘だより

176号



6月の月例会について

6月の月例会では、白樺文学館の稲村学芸員より、我孫子ゆかりの画家である原田京平についての解説がありました。

「浜松の芸術家 原田京平の生涯」

2021年11月1日から同年2月13日まで、静岡県浜松市の浜松文芸館で、現在の浜松市（旧磐田郡上阿多古村）出身の芸術家、原田京平を特集した企画展が開催されました。

○原田京平とは

原田京平（1895～1936）は、志賀直哉とも交流を持った、我孫子に住んだ文人のひとりです。京平は洋画家であるとともに歌人でもあり、その作品の中には我孫子を題材としたものも少なくありません。

しかし今日、原田京平の名を知る人は少なく、「埋もれて」しまった人物となっています。

○我孫子とのかかわり

原田京平は1921（大正10）年10月から1928（昭和3）年3月までの約7年間我孫子で暮らしました。京平が我孫子にやってきた大正10年は、志賀直哉はじめ中勘助や瀧井孝作などの文人が我孫子に移住しており、文人たちが集う文化空間が成立していました。

志賀直哉の日記には大正12年1月18日、「前夜十一時原田氏の所で女兒安産」という一文があります。この「女兒」とは京平の長女である麻那のことです。また、京平のデッサン用にバーナード・リーチの茶器などを貸したことや、夜が更けるまで語りあったことが日記に残っており、志賀直哉はじめとする文人たちと我孫子の地で密な交流があったことがうかがえます。

原田京平に関係する資料は2015年より白樺文学館が寄託を受け、2018年に寄贈されま

した。寄託を受けてからシリーズ展を開催するなど継続的に発信を行っています。

○原田京平一家について

【妻 陸（1897～1984）】

原田京平の妻、陸は画家であると同時に詩人であり、原田京平関係資料にも詩が残っています。天逝した京平に代わり、二人の娘を育て上げたのも陸でした。

【長女 麻那（1922～2006）】

我孫子生まれの麻那は染織家として知られ、柳宗悦の甥である柳悦孝に師事しました。国画会に所属し、日本民藝館や山種美術館などにその作品が残っています。

【次女 南（1925～2008）】

麻那と同じく我孫子に生まれた南もまた画家として猪熊弦一郎に師事し、挿絵画家として活躍しました。彼女が当時私営の白樺文学館を訪れたことがきっかけとなり、我孫子での原田京平研究が始まりました（ちなみに南さんが白樺文学館を訪れたのは「十一月三日午後の事」であったそう！）。そのときに対応したのが、村川ガイドの故矢野正男さんでした。

○原田京平研究

このように、原田京平は多くの文人たちと交友関係を持った人物でありながら、その名はあまり知られていません。それは京平が40歳という若さでこの世を去ったことや、雅号が多いこと、長女の方が有名になったことなどが要因とされているといえます。

しかし、京平が取り組んだ絵画の種類は多岐にわたり、我孫子の風景を描き残した画家としても重要です。

また歌人としても、京平が師事した窪田空穂が

らは高い評価を受けています。現状の調査段階では京平は「歌人」を名乗ったという記録がないだけに、短歌の評価についても研究が望まれます。

○原田京平一家の位置づけ

京平が我孫子で過ごした期間は、すでに武者小路実篤や柳宗悦は転出してしまっており、志賀直哉が我孫子で暮らした時期も最初の数年のみでした。しかし、京平は多くの文人たちと交流しながら夫妻で活動を続け、その活動は二人の娘にも継承されました。

このような経緯を踏まえると京平とその一家は「志賀直哉たちが作り出した我孫子・白樺派ともいうべき文化空間の継承者」としての位置づけができるかと稲村学芸員は言います。

京平は昭和3年には世田谷に移住しますが、京平一家が継承し、残したものが語ることはとても我孫子の歴史にとって大きいものなのかもしれません。

明治に入って間もない頃に建てられたこの建物は、骨組みは木材、壁はレンガという「木骨煉瓦造」という工法で建てられています。使用されたレンガを焼いたのは地元の瓦職人だったそうで、よく見るとレンガの色合いがまばらだったり、細かい気泡が入っていたり



するのがわかります。

【操糸所（国宝）】

東置繭所と同年に建てられたこの建物は、繭から生糸を取るための施設で、当時としては世界最大規模だったそうです。骨組みにトラス構造という工法を用いて建物内には広い空間が確保されています。現在並んでいる機械は創業当時のものではなく昭和時代のものですが、建築当時に先駆的な工法を採用



したからこそ、今日まで機械を入れ替えるために改修されず、昔日の面影を今に残していると言えるかもしれません。

富岡製糸場の解説員さんは、決まった話すことがある一方で、自分で好きなことを見つけてそれについて学びを深めているようでした。

旧村川別荘市民ガイドの皆様とも、それぞれの気に入っているところやおすすめの箇所を来場した方に熱く語るという点では共通する点かもしれませんね！

事務局より

次回の月例会は7月4日（月）教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

よろしくお願い申し上げます。

市民ガイド研修旅行に行ってきました

5月26日（木）、旧村川別荘市民ガイド12名と事務局3名で群馬県の富岡製糸場へ研修旅行に行ってきました。

○群馬県立世界遺産センター セカイト

最初に訪れた「セカイト」は、繭の保管などに使用された「富岡倉庫」を改修したガイダンス施設で、富岡製糸場や絹産業の歴史やその価値について情報発信を行っている施設です。

内部にはシアターやプロジェクターを利用した展示があり、趣向を凝らした展示が行われていました。

○富岡製糸場

昼食に群馬県の郷土料理であるおっきりこみを食べた後、富岡製糸場に向かいました。今回は解説員にガイドをお願いし、富岡製糸場の歴史やエピソードを解説していただきました。

【東置繭所（国宝）】

1872（明治5）年建築の東置繭所は主要建物としては最も早い段階に建てられた建物の一つで、正面のアーチに「明治五年」の銘が入った石が配されていることで知られています。

令和4年7月21日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL.04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより



177号

7月の月例会について

7月の月例会では、文化・スポーツ課の柏瀬より、「我孫子の古代と内海社会」と題して我孫子市の遺跡からわかる茨城県とのつながりについてお話ししました。

「我孫子の古代と内海社会」

1. はじめに

我孫子は北に利根川低地、南部に手賀沼が広がっており、その間に平坦な台地が広がる地形を有しています。そして我孫子のシンボルともいえるべき手賀沼は、古代以前には印旛沼・霞ヶ浦などと連なる広大な内海でした。

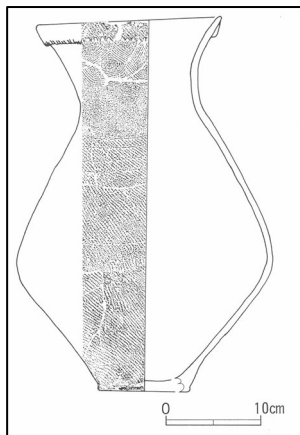
この内海は「香取海」、「古鬼怒湾」と呼ばれ、我孫子を含む千葉県北部の一角は、茨城県南部とこの内海を通じて密接につながっており、常総地域(「ちばらき」として県境を越えたモノの分布が見られます。

2. 我孫子に見る「ちばらき」

○弥生時代

我孫子市内では弥生時代の遺跡は非常に少ないながらも、この時期に人々が暮らしていたことがわかっています。

我孫子市から出土した弥生土器には、いずれも縄文が全面に施されており、こういった土器は千葉県内では八千代市などで多く見られます。東京湾に面する市原市などの内房地域のものと比べると、形や文様がまったく異なる一方で、茨城県の同じ時代の土器を見ると、非常によく似た土器が見られます。



こうした我孫子でみら 岡発戸新田貝塚出土の弥生土器

れるような土器は「北関東系弥生土器」などと呼ばれており、常総地域以北に見られる土器の特徴です。

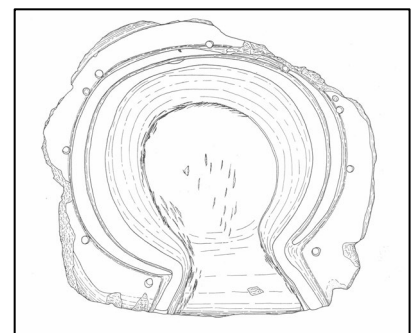
○古墳時代

前方後円墳に代表される新しい墓の形が現れる古墳時代には、その古墳の要素にも「ちばらき」なあり方が見られます。

【石枕】

例えば古墳の死者を埋葬する施設に置かれたモノに石枕というものがあります。読んで字のごとく死者のための石製の枕で、茨城県南部から千葉県北部に集中して見られます。

我孫子市では根戸の金塚古墳から出土しており、石枕に立てられた装飾品と考えられる立花も出土しています。近隣では柏市布施の弁天古墳でも出土しており、金塚古墳と並び石枕の分布の西限に位置しています。



金塚古墳出土の石枕(根戸)

【箱式石棺】

死者を収める部屋のつくりにも特徴があります。旧村川別荘から船橋我孫子線を挟んで反対側に位置している高野山古墳群では、板状に切り出した石を組み合わせて作った棺が使われており、箱式石棺と呼ばれています。この箱式石棺も千葉県北部から茨城県南部一帯に分布しているもので、前方後円墳の後円部上に埋葬施設を設けず、くびれ部など変わった場所に埋葬していることもこの地域の特徴です。

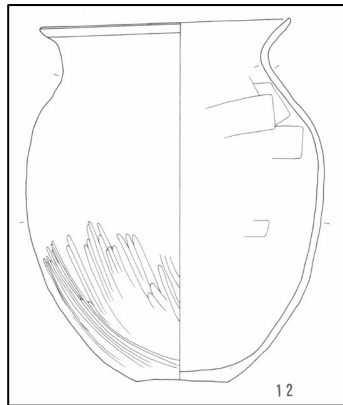
【常総甕】

古墳時代の「ちばらき」の様相は、エリートたちが葬られた古墳だけでなく、人々の暮らしの中にも見られます。その代表的な例として、「常総甕」と呼ばれる土器があります。甕は今でいう鍋の役割を担う土器ですが、ほかの土器と比較してその地域の特徴が現れやすい土器です。

さて、この常総甕は我孫子市内の古墳時代から平安時代にかけての遺跡では必ずと言っていいほど出土する土器で、胴部の下半分を丁寧に磨き、土器をよく見ると、

その土に混ざっている鉱物のためにキラキラ光って見えることが特徴です。

また、この常総甕は古墳時代に出現しますが、その後も平安時代まで連綿と使われ続けました。



西原遺跡出土の甕(日秀)

3. 「ちばらき」なものが語ること

ここまでで上げてきたモノたちの特徴は、もちろん内海「香取海」に面して分布しているということです。このことから、当時の人々が陸路と同様、あるいはそれ以上に波穏やかな内海や川をたどった舟による交通を重視していたことが考えられます。

例えば箱式石棺を古墳に築くには大きな石材を多く必要としますが、我孫子周辺からは石材が採れないため、外部から持ってくる必要があります。しかし石材は大変重く、陸路で運んでくるには大きな労力がかかります。しかしいったん舟に載せてしまえば内海や河川をたどって今の手賀沼近辺まで持ってくることで、大きく省力できます。

考えてみれば、陸路が大きく整備された江戸時代でさえ、利根川を付け替えなどして舟運が整備されて布佐が河岸場として大いに栄えたのですから、古代の人々が交通に舟を頼ったのは当然かもしれません。

4. 我孫子と内海社会の古代への位置づけ

【東北日本への玄関口として】

奈良・平安時代の朝廷にとって、東北をいかに支配するかということは大きな課題でした。そのために交通路を整備することは喫緊の課題であり、古代では都から各国へと向かう駅路が整備されていきました。

しかし、水上交通も重視された古代の社会で、舟を都から東北へと向かわせるには大きな障害がありました。東海方面から東北へと向かうには、東京湾に入らずに房総半島沖から鹿島灘を通過して福島県の浜通り沿いへと向かうルートが最短ですが、房総半島沖から鹿島灘にかけては黒潮の流れが速く、さらに銚子沖で東へと離岸してしまうため、海上交通の大きな難所となっています。

このため、東京湾岸からいったん陸路を通過して波穏やかな内海へと出ること、危険な房総半島沖合を避けるルートが採られたと考えられます。

我孫子には古代には一時期東海道が通り、相馬郡衙が置かれました。常総地域の内海社会は東日本の北と南をつなぐ役割をもっていました。我孫子はその中であってさらに内海社会への玄関口としての役割があったのかもしれませんが。

熱中症にご注意ください！

早くも梅雨が明け、連日暑い日が続いています。旧村川別荘でのガイド活動に際しても、熱中症には細心の注意を払っていただきますようお願いいたします。

- こまめな水分・塩分補給を心掛けください
- 暑い日は無理に外に出ず、新館の冷房を利用ください
- 体調がすぐれないときはご連絡を！
- 身に危険を感じたときは迷わず救急車を呼んでください！



事務局より

次回の月例会は8月2日(火) 教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。よろしくようお願い申し上げます。

令和4年8月25日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL.04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより



178号

8月の月例会について

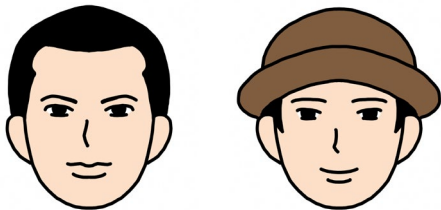
8月の月例会では、杉村楚人冠記念館の武藤学芸員より、夏期企画展 杉村楚人冠生誕 150 年記念展示「杉村楚人冠の青少年時代—名ジャーナリストの原点を探る—」の展示会解説をお願いしました。

杉村楚人冠生誕 150 年記念展示「杉村楚人冠の青少年時代—名ジャーナリストの原点を探る—」

今年、杉村楚人冠は生誕 150 年を迎えました。それを記念して、楚人冠の青少年時代に焦点を当てた展示を初めて行ないます。

和歌山に生まれた少年杉村広太郎は、どのような人と出会い、どのようなことを学んで、ジャーナリスト杉村楚人冠となったのか、残された資料や書簡をもとに、楚人冠の青少年時代を紐解きます。

本展示では、「こうたろうくん」と「ろうせんくん」が当時の様子など解説するパネルも増やし、よりわかりやすく展示内容を解説しています。



左：「ろうせんくん」こと古河老川と
右：「こうたろうくん」こと杉村広太郎
写真はイラストのもととなった写真



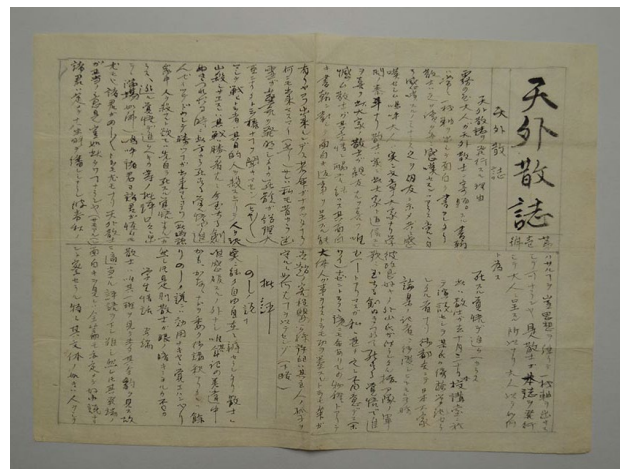
※本展示では趣旨に基づき、楚人冠を「広太郎(こうたろう)」と呼びます。

呼び名には変遷があり、お母さまは「ひろさん」と呼んでいたことから、「ひろたろう」でしたが、海外との交流が生まれる中で「こうたろう」と名乗るようになりました。事実、広太郎のトランクには「K.S.」というイニシャルが記されています。

1. はじめに (ジャーナリズムの目覚め)

広太郎は幼い頃から日記に興味を示し、自らも学校であった出来事を書き残すようになりました。広太郎の日記はただ一日のできごとを書き記すものではなく、印象に残った日常の一コマを切り取るものでした。広太郎による詳細な日記の記述のおかげで、当時の和歌山中学で起きたストライキの顛末を知ることができます。

また、この中学校で、広太郎は後の親友と出会うこととなります。それが、古河勇(いさむ)です。古河は寺の息子だったこともあり、仏教に強い関心を示していました。そんな古河は中学退学後に広太郎と、『天外散誌(てんがいさんし)』と名付けた雑誌による文通を始め、その仲を深めていきます。



古河と交わした書簡「天外散誌」
雑誌の体裁をまねて文通を行った

生涯の友を見つけた学生生活でしたが、和歌山中学でおきた事件をきっかけに広太郎は中学を退学し、上京を果たします。

※広太郎は、日記を書くことにより、高い文章力や印象的なできごとをわかりやすく伝える能力を身に付け、友人との文通から、客観的な批評をとおして、さらに「書く力」を養った
→楚人冠誕生の土台となる時代

2. 文学青年の目覚め

弁護士になり、母親孝行をしようと計画した広太郎ですが、学校では年齢が一番若く、なかなか思うように良い成績が取れることはありませんでした。

あわせて、文学にも興味を抱き、青年文学会が発行する『青年文学雑誌』等の公刊雑誌へと活動の幅を広げていきます。

有名な評論家などの口述筆記を行い刊行していた『青年文学雑誌』を、会員の意見発表と討論の場である『青年文学』へと押し上げたのは、誌面で自らの意見を発表し、広太郎でした。広太郎は着々と、批評の力をつけていくこととなります。

※自らの文章を相手に分かりやすく伝え、また、相手からの意見を正しく聞き取り、自らの意見を発表した

→情報を正しく理解し、発信する時代

3. わかりやすく伝える

法律学校に併設されていた英語学科に入った広太郎は英語に対して頭角を現し、本格的に英語を学ぶために国民英学会に入学し、強い師弟関係を結ぶこととなる博言博士イーストレーキと出会います。



左が楚人冠

そこで伝える力を養います。

広太郎はイーストレーキに認められ、生涯にわたってイーストレーキの仕事である出版・教育事業に携わっていきます。広太郎は持ち前の英語力で教壇に立つかわら、通信講座用のテキストも執筆し、

※新しい情報を得ようとしている人に対して、わかりやすく物事を伝える文章力を培った
→正しい伝達を心がける時代

4. 公平な情報発信への気づき

広太郎は、仏教だけでなくキリスト教も学んでいた古河の勧めで、キリスト教の一派ユニテリアンの学校である自由神学校に入学します。

ここで広太郎は、仏教と他の宗教を比較して共通点や問題点を見出す視点を身につけました。

また、広太郎は古河とともに迷信の根絶、国家公認の宗教としての保護に反対し、「新たな仏教」を模索する経緯会の中心人物でした。雑誌『新仏教』で広太郎は、自由討究、政治上の保護・干渉の排斥を求める解説を書きました。

広太郎は仏教改良運動を進めていきますが、その隣に、明治32(1899)年11月、結核のため29歳の若さで亡くなった古河の姿はありませんでした。

※情報発信に妨げになる権力からの脱却を模索した

→公平な情報発信への目覚めた時代

5. おわりに

武藤学芸員がぜひ見てほしいとおススメの天外散誌など、今回の展示の魅力をたくさん語っていただきました。楚人冠の頭の中を垣間見ることができる展示です。

本展示をより深く知るために解説書として文化財報告第20集『杉村楚人冠の青少年時代一名ジャーナリストの原点を探る一』(300円)も出ていますので、展示と併せてご覧ください!

熱中症にご注意ください!

- 体調がすぐれないときはご連絡を!
- 身に危険を感じたときは迷わず救急車を呼んでください!



事務局より

次回の月例会は9月2日(金)教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

よろしくお願い申し上げます。

令和4年9月22日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL.04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより

179号



9月の月例会について

9月の月例会では、文化・スポーツ課の柏瀬より、福岡県柳川市の「水郷柳河」についてお話ししました。

「水郷柳河について」

1. 「水郷柳河」とは

水郷柳河は福岡県柳川市の旧柳川城を中心とした一帯に広がる景勝地であり、詩人・北原白秋の生まれ故郷として知られています。

また平成 27(2015)年には国指定文化財となり、柳川市では『水郷柳河保存活用計画』を策定して計画的な保存・活用を図っています。

柳川市は福岡県の西南部、筑紫平野から有明海に注ぐ筑後川の河口すぐ東に位置しています。市域はその全体が低地で、南部は有明海に面して干潟が広がっています。



柳川市の位置

2. 柳河と掘割

柳河の景観を最も特徴づけているのは、「掘割」と呼ばれる、網目状に張り巡らされた大小さまざまな水路です。この掘割は、農業・生活用水、運河、堀などと様々な機能を持っており、柳河に住む人々の暮らしと密接にかかわりあっています。

例えば右上の写真は幅が 10m ほどある大型の掘割で、観光用の小舟が泊まっていることからわかるように、運河としての機能を有していたことがわかります。

それに対してその下の写真の掘割は幅 2m ほ



どで舟が入っていくのは難しく、こうした水路では用水のほか、炊事や洗濯などにもっぱら使われていたのではないかと考えられます。

3. 詩人北原白秋の故郷として

北原白秋(1885～1942)といえば、童謡の「待ちぼうけ」や抒情歌「城ヶ崎の雨」の作詞者として知られる、近代日本を代表する詩人です。

そして白秋にとって、柳河は早稲田大学への進



北原白秋生家(現北原白秋記念館)

学を志して、明治 37(1904)年に上京するまでの 19 年間に過ごした故郷であり、生涯にわたって彼の作詩活動の源泉であり続けました。白秋は柳河への想いを次のように記しています。

水郷柳河こそは、わが生れの里である。この水の柳河こそは、我が詩歌の母體である。

「水の構圖」より

また、白秋の詩の中には柳河をうたったものが少なくありません。例えば、「水路」という詩には次のような一節があります。

とある家のひたひたと光る汲水場に ほんのり
立った女の素肌 何を見てゐるのか ふけた夜
のところに。

『思ひ出』より「水路」

ここでいう「汲水場」とは掘割の水を利用するための施設の事であり、柳河で掘割沿いを散策すると家々から水路に向かって降りていく写真のような階段がところどころで見られます。今日では日常生活で利用することはほとんどないようですが、昭和のある段階までは、こうした汲水場で炊事や洗濯が行われていました。

このほか、「紺屋のおろく」という詩には、



掘割と汲水場

にくいあん畜生と、擁へた猫と、 赤い入日にふ
とつまされて、 瀧に陥って死ねばよい。

『思ひ出』より「紺屋のおろく」

という一節があり、有明海に連なる広大な干潟に沈んでいく夕日もまた、白秋に大きなインスピレーションを与えていたようです。

このほかにも柳河をうたった詩は「柳河」や「かきつばた」など多くあり、そうした詩の中の風景が柳河では随所に見られます。

4. おわりに

このように、柳河では、白秋の詩に現れた風景を感じる事ができ、近代文学に描かれた風景を、時を越えて感じられる場所といえるかもしれません。

翻って我孫子を見ると、近代には別荘地として、また一時的ながらも白樺派の拠点となっていたことはご存じの通りです。

そして志賀直哉の「雪の日」や「十一月三日午後後の事」などのように我孫子を舞台・題材とした作品も少なくありません。

ガイドの皆様も、我孫子の文学とその風景という視点で我孫子を見て、我孫子の「文学スポット」を発見してみたいはいかがでしょうか？

旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」を開催します

過去 2 年間にわたって新型コロナウイルス感染症予防のため中止してきた、秋の夕方のイベントを再開します。

ガイドの皆様におかれましては、別添の当日出欠確認票を、12 月シフト調査票と併せてご提出をお願いします。

○令和 4 年 11 月 25 日(金)

- ・午後 4 時～7 時(荒天中止)
- ・SP レコード鑑賞会

○令和 4 年 11 月 26 日(土)

- ・午後 4 時～7 時(荒天中止)
- ・コカリナ演奏会

当日は上記のイベントのほか、キャンドルなどを用いたライトアップも行う予定です。

皆様のご参加、お待ちしております。

事務局より

次回の月例会は 10 月 3 日(月) 教育委員会 大会議室で午前 9 時 30 分から行います。

よろしくお願い申し上げます。

令和4年10月22日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL.04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより



180号

10月の月例会について

10月の月例会では、10月と11月のシフトの調整を行い、11月のイベント「別荘地浪漫的な夜」について案内を行いました。

また文化・スポーツ課の石原より、相島新田の旧井上家で行われていた絞油業についてお話ししました。

「江戸時代中・後期における井上家の絞油業」

1. はじめに

近代以前の、ガスや電気が開通する前の生活では、「あかり」を得るためには、薪やろうそくなどの燃料が必要でした。そして江戸時代に主に燃料として用いられたのが「灯油」です。

こうした灯油を原料から製造する生業の事を、「絞油業(しばりあぶらぎょう)」と呼びます。そして相島新田の井上家ではこうした絞油業が江戸時代後期に行われていました。

今回の月例会では、江戸時代、そして井上家で絞油業とはいったいどういったものだったのかについてお話ししました。

2. 江戸時代の絞油業

江戸時代の灯油として用いられたものには、鰯や鯨から採れる動物性の「魚油」と菜種や綿などから採れる植物性の「水油」があり、その水油の中でも菜種油は優れた灯油とみられていたようです。

「江戸時代の農業ジャーナリスト」とも呼ばれる大蔵永常(1768-1861)の著による『油菜録』・『製油録』などには、菜種の栽培から実際に油を搾るまでのノウハウが述べられており、特にその搾油作業には複雑かつ大がかりな工程が必要だったことが分かります。

このようにマニュアルが著されるほどに菜種油の絞油業が注目を集めた背景には幕府の政策があったようです。江戸時代初期の絞油業の中心

地は大坂などの近畿地方一帯でした。しかし江戸時代中・後期になると全国的にも夜なべ作業が増加し、灯油需要が高まったため、江戸の灯油需要に供給が追い付かなくなってしまいます。

こうした状況を受け、幕府は江戸に油市場を移し、江戸周辺の関東の農村で灯油の供給源となる地域を作り出そうとしたといえます。

ちなみに江戸時代の灯具といえば、行灯が知られていますが、この行灯にはその形に地域差があり、関西では丸形、関東から角形のものが使われていたようです。

3. 近世中・後期における井上家の絞油業

こういった時代背景のもと、井上家でも絞油業が行われるようになります。井上家で絞油業が始まるのは天保年間(1830-1844)とみられ、その中でも天保15年から絞油業による収入が見られるようになることから、この年から本格的に絞油業が開始されたと考えられます。

当時の当主は井上家9代目井上主信(綱次郎)で、7代目と8代目が相次いで早逝し、家の存続が危ぶまれる中、家政の拡大を試みたのではないかと推測しています。

さて、井上家資料の「油店勤取調帳」には、井上家の絞油業の収支などが記載されており、当時の絞油業の経営状況が分かります。

それによると、支出のうち、半分以上が菜種の仕入れと作業に必要な用具などの費用に使われていたことが分かります。またそのほか油職人の賃金などに出費が充てられていたようで、6年間平均で656人もの雇用数があったとのこと。

このことから、井上家では絞油業の実施にあたっての近隣の村々への雇用も創出していたのではないかと推測しています。

ちなみに嘉永2年(1849)の収支や利益を現代価格にすると

支出約 3,269 万 3,850 円

売上約 3,457 万 9,650 円

収支約 296 万 3,157 円

となり、黒字経営がなされていたことが分かります。

また作業を行う建物や絞油用具など、井上家で行われていた絞油業に関するモノの資料はほとんど伝わっていませんが、民具資料にわずかながら残っています。写真は井上家に残る焼印で、「相



井上家に残る焼印〔相島油屋〕

島油屋」と印字があります。

油は酒などと同様に樽に詰められて出荷されましたが、その際に商品ラベルの要領で焼印が押されていたようです。

4. おわりに

井上家に残った資料を丁寧に紐解いていくと、井上家で行われていた絞油業が一体どういったものだったのかが分かります。

しかし、井上家が菜種をどこから調達したか、地場産業としての絞油業経営の在り方、江戸まで運んだ具体的方法などわからないこともまだあるとのことで、今後の研究に期待が高まります。

旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」について

前回の旧村川別荘だよりでもお知らせしましたが、来月、旧村川別荘では秋季イベント「別荘地浪漫の夜」を開催します。

夕刻の母屋内部を、民具を用いて幻想的にライトアップするほか、敷地内もキャンドルを用いたライトアップを行います。

○令和4年11月25日(金)

- ・午後4時～7時(荒天中止)
- ・SPレコード鑑賞会

○令和4年11月26日(土)

- ・午後4時～7時(荒天中止)
- ・コカリナ演奏会

11 月月例会でミニワークショップをします！

11月のイベント「別荘地浪漫の夜」に先立って、11月月例会では牛乳パックで灯籠を作るワークショップを予定しています。

よろしければ月例会の際、下記の道具をご持参いただき、ワークショップにご参加ください。

- ・牛乳パック (500ML)
※1Lのものを半裁していただいても問題ありません。
- ・カッター

皆様の作った牛乳パック灯籠を「別荘地浪漫の夜」に置いてみませんか？

敷地内の枯れ枝にご注意ください！

旧村川別荘には多くの樹木がありますが、その中には枝が枯死してしまっており、落下する恐れがあるものがあります。

落下の危険性が高いものから順次剪定作業を行う予定ですが、ガイドなどでお越しの際は頭上にご注意ください。

事務局より

次回の月例会は 11月2日(火) 教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

一段と寒くなっていきます。ガイドの皆様もお体には十分ご注意ください！



旧村川別荘だより

令和4年11月29日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL.04-7185-1583 (直通)
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

181号

11月の月例会について

11月の月例会では、11月と12月のシフトの調整を行い、杉村楚人冠記念館・武藤学芸員より、杉村楚人冠記念館冬季企画展「手紙にみる歴史の断片」についてお話ししました。

また、25日・26日に実施した旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」に設置した牛乳パック灯籠を作るミニワークショップを行いました。

杉村楚人冠記念館 冬季企画展

「手紙にみる歴史の断片」について

1. はじめに

ジャーナリスト・杉村楚人冠に送られてきた手紙には、教科書に載るような歴史的事件に関する記述があるものが少なくありません。

本展示では、そういった事件や戦争に関する史料を紹介しています。

2. 楚人冠に送られた書簡と歴史的事件

○ノルマントン号事件

ノルマントン号事件は、明治19（1886）10月24日、イギリス商船ノルマントン号が沈没し、乗船していた日本人客全員が溺死した事件です。日本人乗客を見捨てて脱出したイギリス人乗組員には全員に無罪判決が下り、領事裁判権など不平等条約撤廃の世論が大きく高まりました。

この事件に関して、[ノルマントン号沈没の件に付き]という書簡が残されています。封筒もなく、差出人も不明ですが、楚人冠の和歌山中学校時代の先輩である小川啄治からの書簡とみられます。

○閔妃暗殺事件

閔妃は李氏朝鮮26代王高宗の妃でしたが、閔妃と対立する大院君一派と、日本公使・三浦梧楼

によって明治28（1895）年に虐殺されてしまいました。

暗殺に関わった日本人は裁判で無罪となり、朝鮮国内では抗日義兵闘争が始まるきっかけとなりました。

この事件に関して、楚人冠の親友の一人である菊池謙讓や徳富猪一郎（蘇峰）からの書簡が残っています。

○大逆事件

明治44（1911）年明治天皇の暗殺を企てたとして、直接計画と関係のない社会主義者・無政府主義者らが弾圧された事件です。

この事件をきっかけに、国内の社会主義運動はより弾圧を受けることになりました。

楚人冠のもとには事件の当事者となった幸徳秋水や管野須賀子、石川啄木からの書簡が送られています。中でも獄中の管野須賀子から幸徳秋水の無実を訴えた書簡は針文字書簡として注目されます。

○帝人事件

昭和9（1934）年におこった、帝国人造絹糸の株式売買をめぐる疑獄事件です。台湾銀行が所有していた帝人株の売買に背任・贈収賄の疑いがあったとして銀行や帝人、大蔵省の幹部らが検挙・逮捕されましたが、取り調べの不当性が明らかになり、256回もの公判を経て全員無罪となりました。

帝人事件に関しては牧野良蔵や長崎栄造、河合良成といった事件に関連した政治家や実業家からの書簡が送られてきています。

○長いナイフの夜

レーム事件の別名を持つこの事件は、1934年ヒトラーが「突撃隊」指導者レームらを、一揆計画を理由に大量粛清した事件です。

しかしながらそうした計画の事実はなく、ヒトラーは政敵を次々と暗殺し、自身の地位をより確かなものにしていきました。

この事件に関しては、「キノコ博士」と呼ばれ、菌類研究の第一人者であった川村清一からの書簡が残っています。洋行中であった川村は、当時のドイツの血なまぐさい勢力争いの様子を綴って楚人冠に送ったようです。

○2・26事件

武力による国家改造などを求めた陸軍皇道派の青年将校22名によるクーデター事件として知られるこの事件では、皇道派と対抗していた統制派によって皇道派が一掃されたため、軍部の政治的発言力が強くなる結果を招きました。

朝日新聞社のジャーナリスト鈴木文史朗からは、皇道派を厳しく批判する文書を英語で綴っています。

○日中戦争

昭和6(1931)年の満州事変を契機として、6年後の盧溝橋事件を皮切りに始まったこの戦争は、東アジアでの第二次世界大戦の発端となりました。

日中戦争についてはやはり朝日新聞社での後輩にあたる評論家、杉山平助からの書簡が残っています。杉山は従軍記者として2か月大陸各地を周り、戦地で取材を行っており、楚人冠に送られたのはその近況報告です。

3. おわりに

このように楚人冠に送られた書簡には、多くの歴史的イベントの様子を垣間見ることができます。そしてその送り主のうち、少なからずの人物が、事件の当事者ないしは目撃者であり、楚人冠のジャーナリストとしての広くも深い交友を伺うことができます。

事件を目の当たりにした人々は、どのような思いでそれを受け止め、どのような思いで楚人冠へとメッセージを託したのでしょうか。

現代に残された歴史の断片たちを、ぜひご覧ください。

本展示は令和5年1月9日(月曜日・祝日)まで開催しています。

旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」

ミニワークショップを開催しました

11月月例会では、旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」に向け、牛乳パックによる灯籠を作成するミニワークショップを行いました。

ご参加いただいた皆様には思い思いに透かしの形をデザインしていただき、中には事務局でも思いつかなかったやり方で作成していた方もいらっしゃり、それぞれの創意工夫が感じられるワークショップとなりました。



これらの灯籠は、当日母屋の縁側や母屋前庭に設置し、幻想的な雰囲気を作り出していました。

今回のイベントについては、また来月の旧村川別荘だよりで詳細にお伝えします。

事務局より

次回の月例会は12月2日(金)教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

いよいよ年の瀬も近づいて参りました。皆様もくれぐれもお体にはお気を付けてください。

令和4年12月26日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL.04-7185-1583 (直通)

E-mail: abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより

182号



12月の月例会について

11月の月例会では、12月と1月のシフトの調整を行い、白樺文学館の稲村学芸員から企画展「甲斐仁代（かいひとよ）と原田京平」展についてお話しがありました。

白樺文学館 企画展 ー甲斐仁代生誕 120年記念「甲斐仁代と原田京平」について

1. はじめに

柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤等、白樺派の文人たちが我孫子で暮らし、創作・思索の場となりました。文学館では文化空間「我孫子・白樺派」と呼んでいます。彼らが去ったあと、志賀直哉邸にはさまざまな芸術家が集まりました。今回はその芸術家たちを紹介する展示となっています。

2. 志賀直哉邸に集う人々

志賀直哉が大正12（1923）年に我孫子を去ると、その後、島田久兵衛の別荘に住んでいた画家原田京平は志賀の邸宅に移り住みます。

原田が残した写真には志賀邸がよく写りこみ、当時の様子がわかる貴重な資料となっています。



その写真の中に、志賀邸の裏にある崖の上にあった「二階家」と呼ばれた離れの様子が見える写真があります。そこには宴の最中に撮影されたのでしょうか。テーブルには食事が置かれ、若き芸術家が楽しそうに並んで写っています。



この中の右から3人目の洋装の女性が今回の展示の主演、甲斐仁代さんです。

3. 甲斐仁代（生没：1902～1963）

佐賀出身の洋画家。洋画を同郷で東京美術学校（現東京藝術大学）の教授であった岡田三郎助に学びます。

彼女の才能は早くから開眼し、大正12年に行われた第10回二科展に出品し、応募総数3000点のうち50点が入選します。そのなかに彼女の作品「グラジオラス（1923年作）」が入り、洋画界で大きな話題となりましたが、生活は苦しかったと言われていました。しかし、晩年の8年間、石橋正二郎（現ブリヂストン創業者）に支えられたことにより、創作活動に没頭し、生涯描いたとされる1,400点のうち600点以上の作品がこの時期に描かれました。

第一線の女流画家として活躍する一方、後進の育成にも力を入れました。現在は、甲斐のご遺族がギャラリーを茨城県で開き、甲斐の作品を公開しています。

4. 甲斐仁代と我孫子

甲斐仁代は大正13（1924）年～15年に我孫子に滞在したと考えられています。これは、当時生活をともにした、原田家の資料から読み取れます。

今回、ギャラリー甲斐仁代のご協力を得て甲斐の作品をお借りし、展示しています。なかでも「人形」は、大正 15（1926）年に行われた女流美術展覧会に出品され入賞しています。大正 15 年は甲斐が我孫子を離れる年なので、もしかしたら、我孫子で描かれたものかもしれません。

そのほかにも原田家の資料に甲斐の作品が眠っており、甲斐・原田の関係や、我孫子との縁が伺えます。作品は、ぜひ白樺文学館で実物をご覧ください！

本展示では、原田家の作品・資料があることによってわかった甲斐仁代と我孫子との関係を紹介しています。さまざまなピースが繋がっていく過程がわかる楽しい展示となっています。

リナの素朴で透き通るような音色が響き、前日とはまた違った雰囲気、ゆったりとした時間が流れていました。



牛乳パック灯籠と竹灯籠

この 2 日間で、延べ 120 名（25 日：63 名、26 日：57 名）のお客様がご来荘されました。例年の「竹灯籠の夕べ」と比較すると少なめではありましたが、これを機に、旧村川別荘の活用を改めて推し進めていきたいと思えます。

また、今回の実施に当たっては、ガイドの皆様をはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。

ご協力・ご来荘いただいた皆様には改めてお礼申し上げますとともに、今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」を開催しました

11月25日（金）・26日（土）に旧村川別荘「別荘地浪漫の夜」を実施しました。

コロナ禍で「竹灯籠の夕べ」も「ひなのまつり」も中止が続き、3年ぶりの旧村川別荘でのイベントとなりました。



ライトアップされた母屋前の様子

当日はちょうど荘内の木々が色づき始め、もみじなどが見ごろを迎え、ライトアップされた紅葉などを眺めたり、写真に収めたりする方がしばしば見られました。

また、ガイドの皆様にご作成いただいた牛乳パック灯籠は、竹灯籠と一緒に母屋前などに設置しました。

設置箇所は一部ではありますが、幻想的な雰囲気を醸し出していました。

25日にはSPレコード鑑賞会を実施し、白樺文学館・稲村学芸員の快活な？進行のもと、昔懐かしいメロディーが荘内に響きました。

26日にはコカリナの生演奏会を開催し、コカ



母屋前でのイベントの様子（25日）

事務局より

次回の月例会は来年、1月11日（水）教育委員会大会議室で午前9時30分から行います。

今年も残すところあとわずかとなりました。どうぞよいお年をお迎えください。

令和5年2月 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより



184号

2月の月例会を実施しました

2月2日に実施した月例会では、文化・スポーツ課 柏瀬より「手賀沼沿岸の古墳時代——沼のほとりで眠る人々」と題して、我孫子市内の古墳とそこに葬られた人々に関するお話をしました。

手賀沼沿岸の古墳時代——沼のほとりで眠る人々——

1. はじめに

我孫子市のシンボルともいべき手賀沼のほとりには、原始・古代から現代に至るまで多くの人々が集い、暮らしてきました。そうした中でも古墳時代(3世紀中ごろ～7世紀末)は、手賀沼を見下ろすように数多くの古墳が築かれ、一帯に住んだ人々にとって手賀沼が一層重要視されていた時代であったと考えられます。

2月月例会では、こうした手賀沼沿岸の古墳のうち水神山古墳と金塚古墳にスポットを当て、そこに葬られた有力者たちは一体どういった人物だったのかについてお話ししました。

2. 千葉と我孫子の古墳たち

全国には15万基以上の古墳があるといわれ、その前方後円墳の数に限ってみても、北は岩手県、南は鹿児島県に至る、非常に広い範囲に分布しています。

そして千葉県一帯も例外ではなく、千葉県は前方後円墳の数でいえば、奈良県や大阪府などを差



手賀沼沿岸の古墳群

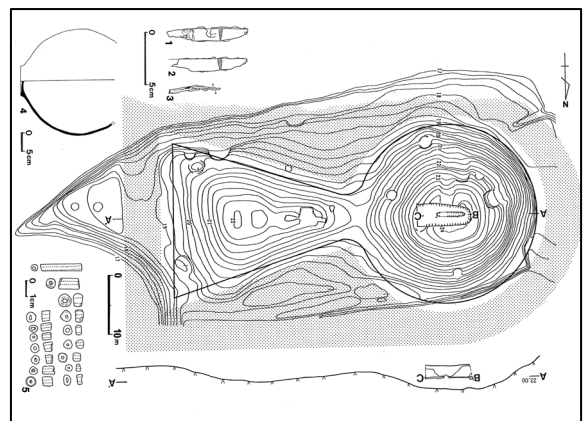
し置いて、なんと全国一位を誇ります。

数多くの古墳が築かれた千葉県ですが、まんべんなく古墳が作られた訳ではなく、その分布には偏りが見られます。千葉県北西部の東葛地域には、内房地域と比較して大型墳は少なく、東葛地域に約500基あるとされる古墳のうち、約400基の古墳が手賀沼周辺にまとまって築かれています。

3. 古墳時代のはじまりと隆盛——水神山古墳

古墳時代に先行する弥生時代には、我孫子市域では確認されている遺跡はごく少数ですが、続く古墳時代になると、手賀沼沿岸には古墳が多く築かれるようになり、高野山桃山公園内ではその最初期の方墳が2基確認されています(前原古墳)。続いて、柏市片山では前方後方墳2基(北ノ作1, 2号墳)が築造され、4世紀末には東葛地域最大規模の古墳である水神山古墳が築かれます。

○水神山古墳の概要



水神山古墳と出土遺物

- ・位置:高野山 440・墳長:69m・墳形:前方後円墳
- ・主体部:粘土槨・時期:4世紀末・出土遺物: ガラス小玉 280個余り、ガラス製管玉 1個、滑石製管玉 1個、刀子 2本、針数本(粘土槨より)、壺型土器(墳丘)

○水神山古墳の特徴と被葬者像

水神山古墳の墳丘はきれいに整っており、東日本的な作り方と西日本的な作り方を合わせたような方法で作られています。

その一方で副葬品は鏡や貝製の腕輪、石製品などというような目立つものがなく、副葬品からは近畿地方とのつながりは希薄と言えます。

こうしたことを考えると、水神山古墳の被葬者は、手賀沼沿岸の小有力者たちを取りまとめる首長としてヤマト王権との関係性を持ち、それまでの古墳とは一線を画するような古墳を築造したものの、その関係性はほかの同じ時期の各地の首長の中ではあまり強くなかったのかもしれない。

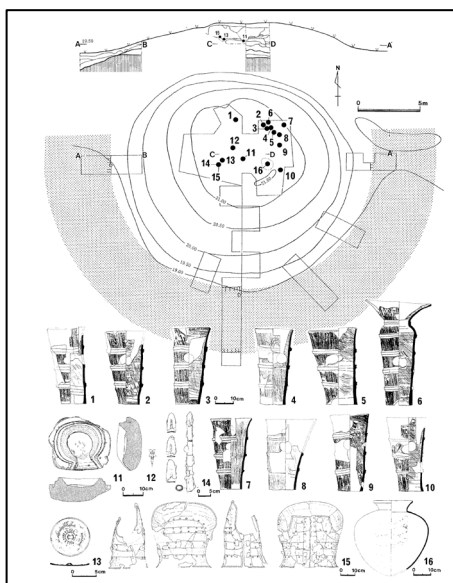
いずれにせよ東葛地域の中でこの時期の古墳は極めて少なく、その中でも飛びぬけた規模を持つ古墳であることから、水神山古墳の被葬者は、手賀沼沿岸、さらには東葛地域一帯を代表するような人物であったのではないかと考えられます。

3. 古墳時代の転換点—金塚古墳

水神山古墳が築造されたのち、周辺には古墳は作られず、首長の系譜は断絶してしまうようです。続く5世紀代の古墳としては、柏市布施の弁天古墳(前方後円墳・35m・5世紀前半～中葉)、同花野井の大塚古墳(円墳・20m・5世紀末)根戸に金塚古墳が築かれます。

○金塚古墳の概要

・位置:根戸 1340・墳長:20m・墳形:円墳・主体



金塚古墳と出土遺物

部:木棺直葬・時期:5世紀後葉～末・出土遺物:短甲、鉄製片刃鉾、鉄鏃、捩文鏡、石枕、立花(主体部より)、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、椀形土器、須恵器大甕(墳丘)

○金塚古墳の被葬者像

金塚古墳の出土遺物を見ると、まず副葬品に占める武具が、水神山古墳と比べて非常に豊かであることがわかります。特に短甲は地元で生産できるものではなく、ヤマト王権から分配されたものと考えられています。

しかし墳丘規模は20mと小規模かつ円墳で、すぐ近くには同じような規模の大塚古墳が同時期に築かれています。

こうしたことから、金塚古墳の被葬者は、地域を代表するような大有力者ではなかったものの、やはり近畿とのつながりを持った武人的な人物であったことが考えられます。

こうした副葬品の傾向は花野井大塚古墳でも同じであり、こうした武人的な有力者がこの時期には見られたことが言えます。

4. 終わりに

まだこのほかにも特徴的な古墳は多くありますが、東葛地域の古墳の特徴を一言でいえば、とにかく「手賀沼沿岸に集中する」ことだと言えます。

千年以上前の有力者たちは、好んで(あるいはそうせざるを得ない理由があって)手賀沼周辺に古墳を築き、近代には同じ場所に心の安寧を求めて多くの文化人が集いました。その目的は違えど、手賀沼という存在は時を越えて地域の人々にとって重要な生活の要素だったのかもしれない。

事務局より

次回の月例会は3月2日(木)午前9時30分から行います。

今回の月例会は試験的に旧村川別荘新館に会場を戻して実施します。

ガイドの皆様におかれましては、お間違えの無いようお気をつけてお越しください。

令和5年2月24日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財係：近藤、手嶋、今野、柏瀬

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

旧村川別荘だより



184号

2月の月例会を実施しました

2月2日に実施した月例会では、文化・スポーツ課 柏瀬より「手賀沼沿岸の古墳時代——沼のほとりで眠る人々」と題して、我孫子市内の古墳とそこに葬られた人々に関するお話をしました。

手賀沼沿岸の古墳時代——沼のほとりで眠る人々——

1. はじめに

我孫子市のシンボルともいべき手賀沼のほとりには、原始・古代から現代に至るまで多くの人が集い、暮らしてきました。そうした中でも古墳時代(3世紀中ごろ～7世紀末)は、手賀沼を見下ろすように数多くの古墳が築かれ、一帯に住んだ人々にとって手賀沼が一層重要視されていた時代であったと考えられます。

2月月例会では、こうした手賀沼沿岸の古墳のうち水神山古墳と金塚古墳にスポットを当て、そこに葬られた有力者たちは一体どういった人物だったのかについてお話ししました。

2. 千葉と我孫子の古墳たち

全国には15万基以上の古墳があるといわれ、その前方後円墳の数に限ってみても、北は岩手県、南は鹿児島県に至る、非常に広い範囲に分布しています。

そして千葉県一帯も例外ではなく、千葉県は前方後円墳の数でいえば、奈良県や大阪府などを差



手賀沼沿岸の古墳群

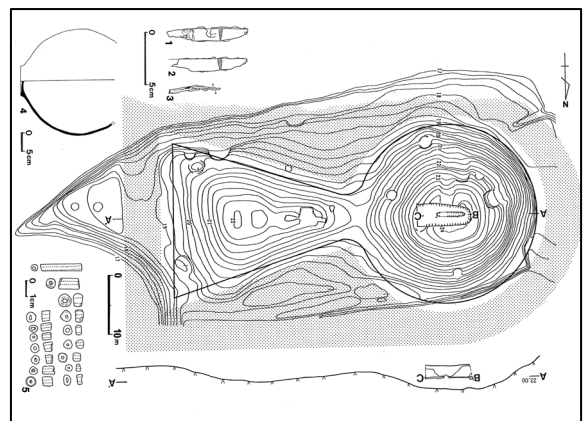
し置いて、なんと全国一位を誇ります。

数多くの古墳が築かれた千葉県ですが、まんべんなく古墳が作られた訳ではなく、その分布には偏りが見られます。千葉県北西部の東葛地域には、内房地域と比較して大型墳は少なく、東葛地域に約500基あるとされる古墳のうち、約400基の古墳が手賀沼周辺にまとまって築かれています。

3. 古墳時代のはじまりと隆盛——水神山古墳

古墳時代に先行する弥生時代には、我孫子市域では確認されている遺跡はごく少数ですが、続く古墳時代になると、手賀沼沿岸には古墳が多く築かれるようになり、高野山桃山公園内ではその最初期の方墳が2基確認されています(前原古墳)。続いて、柏市片山では前方後方墳2基(北ノ作1, 2号墳)が築造され、4世紀末には東葛地域最大規模の古墳である水神山古墳が築かれます。

○水神山古墳の概要



水神山古墳と出土遺物

- ・位置:高野山 440
- ・墳長:69m
- ・墳形:前方後円墳
- ・主体部:粘土槨
- ・時期:4世紀末
- ・出土遺物: ガラス小玉 280個余り、ガラス製管玉 1個、滑石製管玉 1個、刀子 2本、針数本(粘土槨より)、壺型土器(墳丘)

○水神山古墳の特徴と被葬者像

水神山古墳の墳丘はきれいに整っており、東日本的な作り方と西日本的な作り方を合わせたような方法で作られています。

その一方で副葬品は鏡や貝製の腕輪、石製品などというような目立つものがなく、副葬品からは近畿地方とのつながりは希薄と言えます。

こうしたことを考えると、水神山古墳の被葬者は、手賀沼沿岸の小有力者たちを取りまとめる首長としてヤマト王権との関係性を持ち、それまでの古墳とは一線を画するような古墳を築造したものの、その関係性はほかの同じ時期の各地の首長の中ではあまり強くなかったのかもしれない。

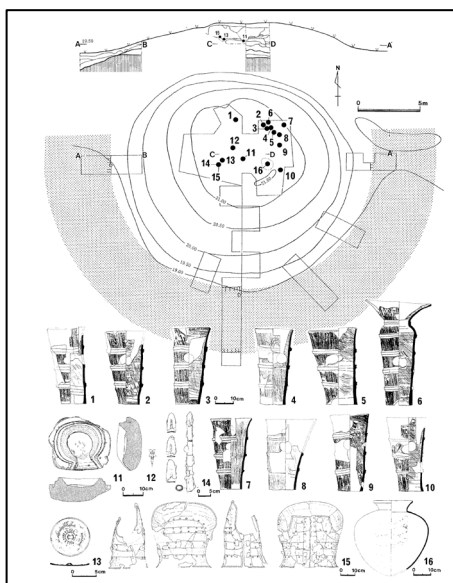
いずれにせよ東葛地域の中でこの時期の古墳は極めて少なく、その中でも飛びぬけた規模を持つ古墳であることから、水神山古墳の被葬者は、手賀沼沿岸、さらには東葛地域一帯を代表するような人物であったのではないかと考えられます。

3. 古墳時代の転換点—金塚古墳

水神山古墳が築造されたのち、周辺には古墳は作られず、首長の系譜は断絶してしまうようです。続く5世紀代の古墳としては、柏市布施の弁天古墳(前方後円墳・35m・5世紀前半～中葉)、同花野井の大塚古墳(円墳・20m・5世紀末)根戸に金塚古墳が築かれます。

○金塚古墳の概要

・位置:根戸 1340・墳長:20m・墳形:円墳・主体



金塚古墳と出土遺物

部:木棺直葬・時期:5世紀後葉～末・出土遺物:短甲、鉄製片刃鉾、鉄鏃、振文鏡、石枕、立花(主体部より)、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪、椀形土器、須恵器大甕(墳丘)

○金塚古墳の被葬者像

金塚古墳の出土遺物を見ると、まず副葬品に占める武具が、水神山古墳と比べて非常に豊かであることがわかります。特に短甲は地元で生産できるものではなく、ヤマト王権から分配されたものと考えられています。

しかし墳丘規模は20mと小規模かつ円墳で、すぐ近くには同じような規模の大塚古墳が同時期に築かれています。

こうしたことから、金塚古墳の被葬者は、地域を代表するような大有力者ではなかったものの、やはり近畿とのつながりを持った武人的な人物であったことが考えられます。

こうした副葬品の傾向は花野井大塚古墳でも同じであり、こうした武人的な有力者がこの時期には見られたことが言えます。

4. 終わりに

まだこのほかにも特徴的な古墳は多くありますが、東葛地域の古墳の特徴を一言でいえば、とにかく「手賀沼沿岸に集中する」ことだと言えます。

千年以上前の有力者たちは、好んで(あるいはそうせざるを得ない理由があって)手賀沼周辺に古墳を築き、近代には同じ場所に心の安寧を求めて多くの文化人が集いました。その目的は違えど、手賀沼という存在は時を越えて地域の人々にとって重要な生活の要素だったのかもしれない。

事務局より

次回の月例会は3月2日(木)午前9時30分から行います。

今回の月例会は試験的に旧村川別荘新館に会場を戻して実施します。

ガイドの皆様におかれましては、お間違えの無いようお気をつけてお越しください。

旧村川別荘だより



186号

3月の月例会を実施しました

3月には、長らく教育委員会で行ってきた月例会を、旧村川別荘新館で実施しました。

久々の旧村川別荘での実施に、ガイドの方々同士の議論も白熱し、熱気の感じられる月例会となりました。



杉村楚人冠記念館テーマ展示

「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」

今回の月例会では、杉村楚人冠記念館の武藤学芸員が、3月まで開催していたテーマ展示「てがみ展 楚人冠の仕事を支えた人びと」の解説を行いました。

1. はじめに

杉村楚人冠が東京朝日新聞社に勤めた国際的ジャーナリストであることは、言うまでもありません。しかし、彼は決して一人で仕事に臨んでいたわけではなく、彼の多岐にわたる仕事を支えた多くの仲間の存在がありました。今回の展示ではそうした人々にフォーカスし、楚人冠の仲間たちを紹介しました。

2. 楚人冠の東京朝日新聞社入社

－池辺三山・松山忠二郎－

池辺と松山は、ともに楚人冠の先輩にあたり、彼の朝日入社に深くかかわった人物です。松山は楚人冠を朝日に勧誘した人物で、彼の誘いのもと楚人冠は面接に臨みますが、文章が過激という理由から不合格となってしまいます(その後、再度面接を受けて合格しています)。

今回の展示では、池辺からの楚人冠の記事を称賛した書簡や、楚人冠から松山へ自身の長女の体調不良を伝える書簡が展示されました。

3. 社会部を育てる

－渋川柳次郎(玄耳)・美土路昌－

渋川と美土路は楚人冠の朝日新聞社の社会部時代の同僚として、ともに働いた人物です。

渋川は、政治・経済面に比べて社会面が低く見られていた当時の風潮を改めるべく、楚人冠とともに社会部の改革を推進しました。渋川はその性格から、あまり社内に協力者が得られず、自身の孤独を吐露するような書簡を楚人冠に送っています。

3. 外国特派を支える

－米田実・Walter S. Scott－

米田とスコットは楚人冠の外国特派員時代に交流のあった人物です。

楚人冠は、自前の英語力を入社後も余すところなく発揮し、外国特派員として海外でも取材を行いました。米田からは、楚人冠の第一次世界大戦下でのベルギー特派に際し、手回しをしている書簡が送られています。

4. 『アサヒグラフ』の創刊

－鈴木文史朗・成沢金兵衛－

楚人冠の代表的な業績として、写真新聞『アサヒグラフ』を創刊したことが挙げられ、鈴木と成

沢もまた楚人冠とともに『アサヒグラフ』の編集に深くかかわった人物です。

鈴木文史朗は『アサヒグラフ』編集長で、派遣先のニュージーランドからの絵葉書が送られています。また成沢は『アサヒグラフ』の掲載写真を担当していた人物で、楚人冠への病気見舞いや近況報告の書簡が送られています。

5. 『楚人冠全集』をつくる

-石堂清倫・土岐善麿-

石堂と土岐は楚人冠の全集刊行に携わった人物です。

石堂は楚人冠に全集の刊行を提案した人物であり、全集の編集を担当しました。彼からは転職後の書簡が大連より送られています。

土岐は石堂の後に増巻された全集の編集にあたった人物で、編集に関するやり取りがあったことが楚人冠に送られた書簡から分かります。

6. おわりに

今回の展示では、楚人冠のジャーナリストとしての交流の広さが改めて感じられました。

また、お話のあと、ガイドさんの中には今回登場した人物とつながりがあるという方もいらっしゃり、楚人冠のみならず、ガイドの皆様の交流の広さもまた感じられました。

「ひなのまつり」を開催しました！

2月28日(火)から3月5日(日)にかけて、ガイドの鷺見さんのご協力をいただきながら、「ひなのまつり」を開催しました。

コロナのため、長らく旧村川別荘でのおひなさまの展示は見送り続け、今回は3年ぶりの旧村



川別荘での「ひなのまつり」開催となりました。感染対策や、防犯上の理由から、今回は母屋の中にお客様はご案内せず、外側からご覧いただく形で実施しましたが、外からだけでもお客様は写真を撮ったり、ご歓談したりしながら思い思いに楽しんでいました。

また、新聞などにも掲載され、それを見ていらっしゃるという方もちらほらといらっしゃいました。

今回の来場者数は556人(ガイド集計)で、コロナ以前と比べると、期間が短かったこともあり、やや少なめです。ですが、これを機に旧村川別荘を市民の皆様にご案内いただく機会を、再度増やしていきたいと思っております。

今回の「ひなのまつり」開催に当たっては、ガイドの鷺見さんをはじめ、つるしびな教室の皆様、開催期間にご協力いただいたガイドの皆様など多くの方々のご協力をいただきました。篤く御礼申し上げます。



事務局より-お客様のマスク着用について

これまで、館内ではお客様にもマスクの着用をお願いしていましたが、3月13日からは来荘者のマスクの着用は原則個人の判断となっております。

そのため、今後はお客様にマスク着用は基本的にお願ひしません。ご承知おきください。

事務局より

次回の月例会は4月12日(水)午前9時30分から行います。

今回の月例会は旧村川別荘新館で実施します。ガイドの皆様におかれましては、お間違えの無いようお気をつけてお越しください。